

(1) 松江大橋完成後の鳥瞰圖

# 松江大橋改築工事

島根縣土木課長 寺田甫

唄で名高い松江大橋は宍道湖と中海を結ぶ大橋川の宍道湖に接する處に架設せらるるものであつて、相當に古い歴史と傳説をもち、構造上にも幾多の變遷を経て今日に至つたものであつて、舊橋は明治二十四年の改築にかゝり其の後數回に渉る根本的修理によつて逐年増加する交通狀勢並に船舶の航行に對し辛じて命脈を保つて居る状態であつた。依て昭和九年度より昭和十一年度に至る三ヶ年の繼續事業として改築を計畫し目下工事中であつて近く竣工の豫定である。

計畫概要を示せば次の如し

## 1. 位置

府縣道松江廣島線

松江市 未次本町 入會  
白瀧本町

## 2. 橋長及幅員

全橋長 134.00米

全幅員 12.00米

内譯	車道	全幅員	6.50米
		有効幅員	6.50米
	歩道	全幅員	2.75米
		有効幅員	2.25米

實面積 1.474.0平方米

## 3. 下部構造

橋臺 二基

長 15.50 米 末口 0.21 米の松丸太  
70本宛の杭打基礎上に扶壁式鐵筋  
コンクリート造とし兩袖には樹木  
を植栽し風致を添へる豫定である  
兩橋臺共 高7.36米 幅14.00米

橋脚 四基

基礎 鉄筋コンクリート井筒

長16.50米 短徑4.00米

長徑12.00米の小判形

基礎井筒施工に就ては地質並に四圍の狀勢、船舶航行の關係等から種々考究の末、航路にあたる二基は特に井筒沓として高5.0米の井筒と同形の鋼製「タイソン」を作り施工に際し航路の障害を最少限度に止むる事とし、他の二基は築島によつて施工する事とした。

橋脚 柱式 直徑 1.40米

高4.90米の鉄筋コンクリート柱四本建

#### 4. 上部構造

(イ)橋體

型式 等高ゲルバー式鋼鈹桁

支間 24.65米 27.00米

30.00米 27.00米

24.65米 の 5 支間

橋格 一等橋

(ロ)橋面 鉄筋コンクリート床版「アスファルトブロック」舗裝

縦斷勾配 中央部三徑間 1/60 拋物線

兩端徑間 1/30 直線

横斷勾配 車道部 1/60 拋物線

歩道部 1/80 直線

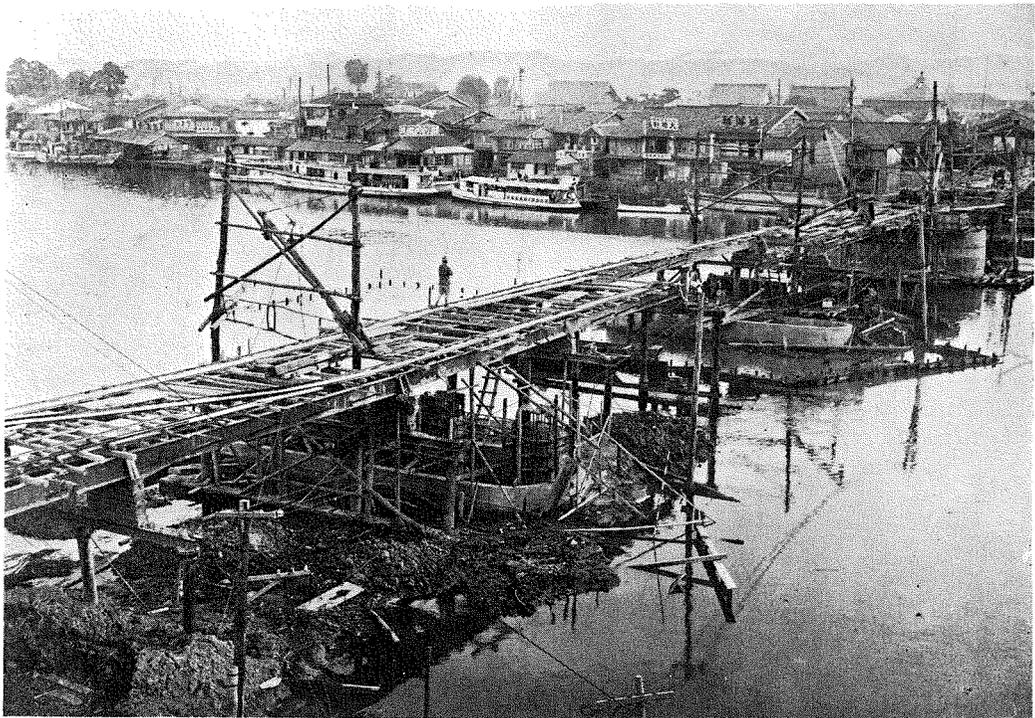
(ハ)高欄 花崗石造擬寶珠高欄

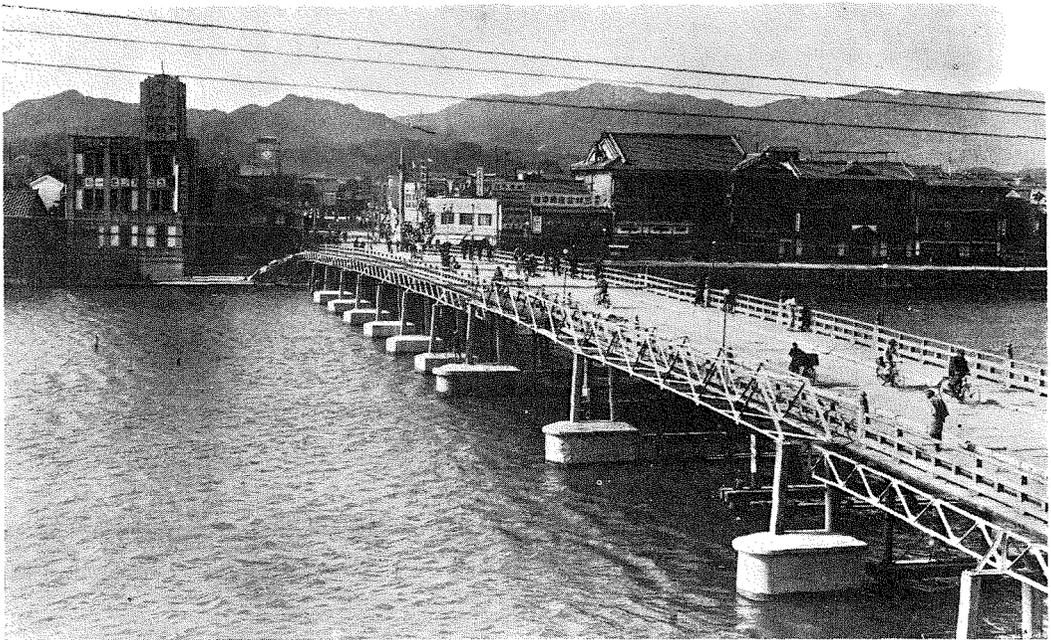
本橋の計畫に當つて特に意を用ひたのは名橋として恥かしをらぬものでありたいことと附近の風致との調和をはかり舊橋の味を失はず純日本趣味の表現につとめた。又觀光に便ならしめんがため中央徑間の兩側に長 20.00 米幅 1.40 米を突出し展望の施設をも附加した。

#### 5. 取付道路

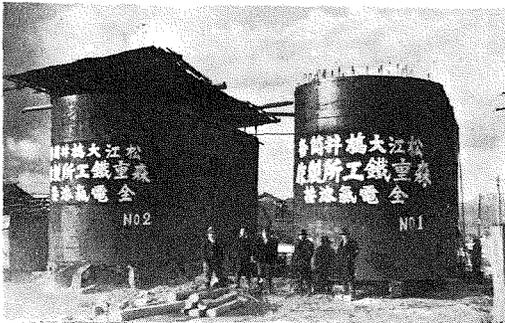
左岸末次本町側 延長 43.00 米

### (2) 唄で名高い松江大橋 (舊橋)

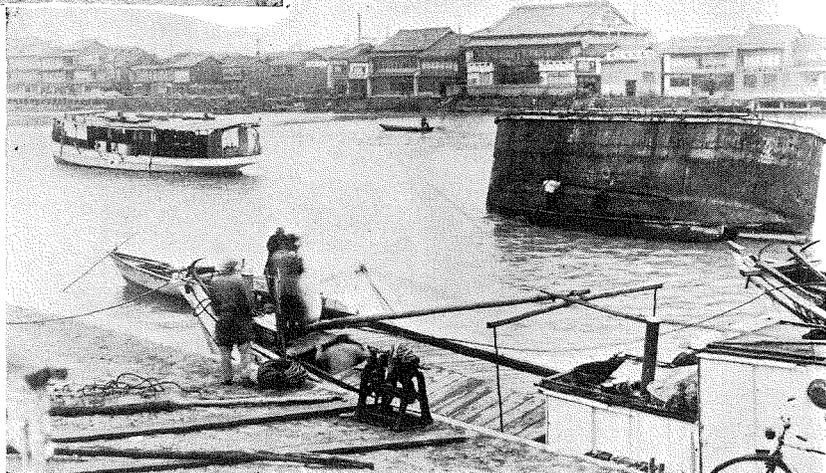




(3) 松江大橋改築工事全景

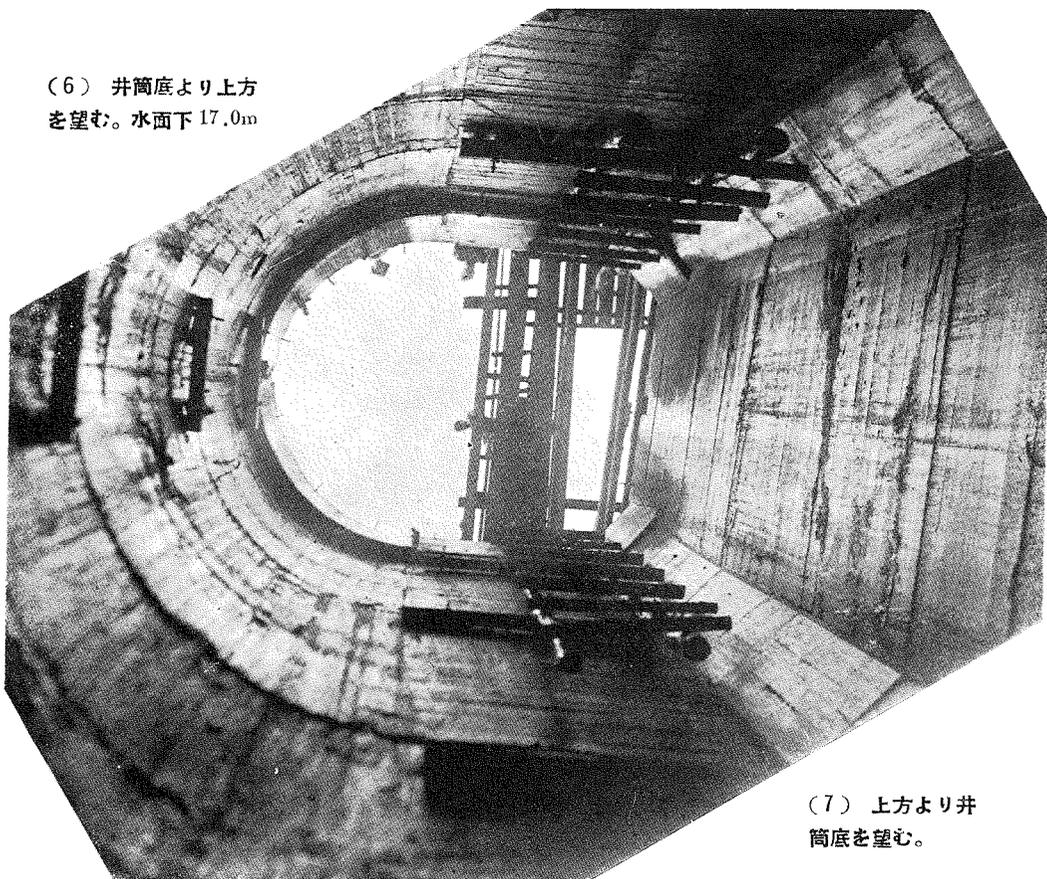


(4) 井筒沓として  
用ひられし鋼製ケーソン

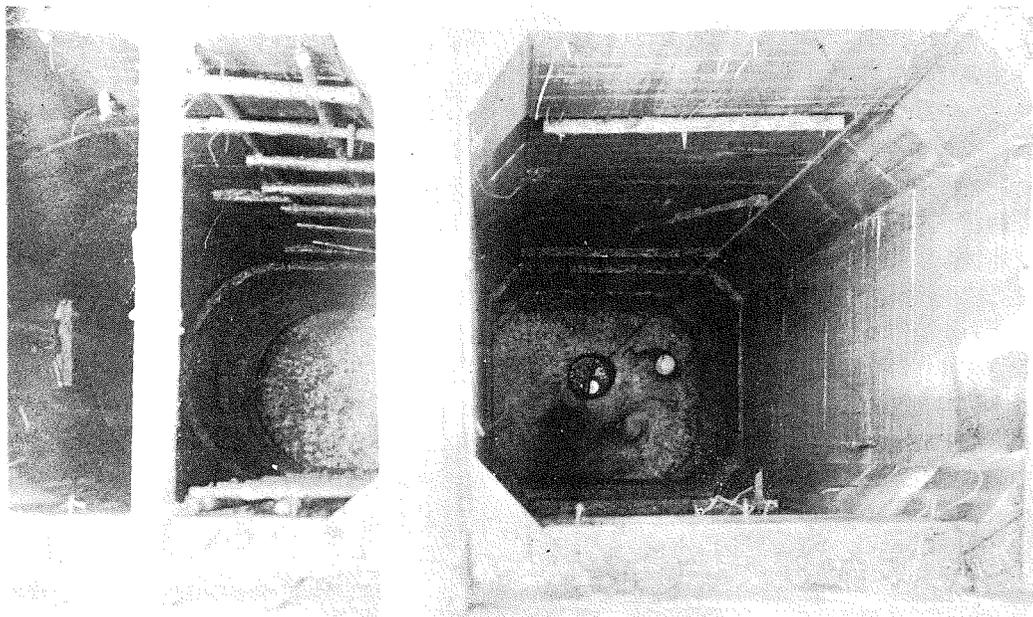


(5) 鋼製ケーソン  
曳航中の状況

(6) 井筒底より上方を望む。水面下17.0m



(7) 上方より井筒底を望む。





(8) 底部コンクリート施工前の井筒底部、昭和 11 年 9 月 11 日午後 5 時の撮影にして後列左端（立つる）が殉職せる深田工學士、二人目は河戸橋梁擔任技師。

副員 12.00 米 勾配 1/25  
 右岸白瀧本町側 延長 42.00 米  
 幅員 12.00 米 勾配 1/25

・ 主要材料

鋼材 524.5 吨 鐵筋 162.12 吨  
 石材 106.6 立米 セメント 19,800 袋  
 砂利 2,544 立米 砂 1,313.4 立米

附記

本橋の架設工事は古來地方稀に見る難工事として俗謡にまで唄はれ何時の頃からは判らないが源助の人柱によつて完成したとの傳説さえもある位である。

本工事は昭和十年十二月二日起工式を擧げ爾來着々進工中の處昭和十一年九月十二日午前七時五十分頃現場擔當主住工學士深田清君は既に第一號橋脚基礎井筒がその沈下作業を終り底部内埋コンクリートを施工する運びと

なつたので（水替も出來て）之が指導監督をなすべく助手並に作業手等四名を伴ひ早朝六時過より出動し水面下 17.00 米の井筒底部に於て活動中計らずも突如上方より「コンクリート」運搬用空「バケツ」が落下し來り君は身を避ける暇もなくこれを頭部に受け悲しくも殉職するの慘事に遭遇せられた。君は昭和六年京都帝國大學工學部土木工學科を卒業し、直ちに職を島根縣に奉じ重要工事の設計に或は施工に幾多の功績を残し、殊に松江大橋に就ては計畫設計より施工まで身命を堵して努力をおしまず、君が責任感は特に強く精勵工事の完璧を期して督勵中はからずも此奇禍に遭遇せしもので、將來を囑望せられし有爲の君を失つた事はおしみても餘りあり痛惜にたえない。特に記して哀悼の意を表する次第である。